

初めて同棲した彼女が垢抜けて、俺は死ぬ

夜果堂書房／高瀬ザクロ

# 第一話

合格発表の掲示板の前で、俺とルカは同じ番号を見つけた。手をつないで駅まで歩く間、指先が汗ばむほど嬉しくて言葉が追いつかなかつた。

春になつたら一緒に暮らそう。そう約束して、四月。

俺たちは十八歳になり、小さなアパートに引っ越した。

六畳にロフト。玄関からキッチンまでの短い廊下に段ボールが積み上がつて、窓の外にはまだ残る桜の花びらがふわりとうごく。

安いカーテンを吊るして、二人で買ったフライパンを棚に入れて、

布団は並べて一枚。

夕方、大家さんが「若いのにしつかりしてるね」と笑つて通り過ぎたあと、俺は玄関の鍵を回してから彼女を見る。

白いシャツにデニム、髪はまだ染めていない黒。

俺だけのものみたいに思えて、胸がいっぱいになる。

「今日から、よろしくね」

ルカがそう言つて両手を差し出す。俺はその手を握り返して、額に軽く口づけた。柔軟剤と新しい部屋の木の匂い。まだ何も染みついていない、真っさらな生活の匂いだ。

初日はガスがまだ通っていないから銭湯で汗を流して、帰りにスーパーの惣菜を買った。テーブル代わりのダンボールに容器を並べて

割り箸で唐揚げをつつく。どうでもいいテレビの話で笑つて、明日の時間割を見せ合つて、気づけば夜が深くなつていた。

「引っ越したばっかのになんか落ち着く。悠真がいるからかな」  
彼女がそう言つて肩をすり寄せる。細い肩がシャツ越しに触れて、  
その線を指でなぞりたくなる衝動がゆつくり膨らむ。俺は息を呑んで、  
彼女の頬に手を添えた。

「……していい？」

「……うん。やさしく、してね」

返事を聞いた瞬間、口で塞いだ。舌を入れて絡め、歯の裏を舐めて  
逃げ道を消す。驚いた息が俺の口の中で震える。シャツをめくつて  
素肌を掴む。肋骨の段差、へそのくぼみ、温度のある皮膚。

両手で胸を持ち上げ、レースの中で尖った乳首を親指と人差し指で挟む。硬さが増すのを確かめて、片方は口に含んだ。先端だけをちゅっと強く吸う。

「ひつ…………そこ、きもちい…………」

反応が欲しくて、胸を揉みながらもう片方の乳首を指先で転がす。背中が布団から離れて、腰が勝手に揺れる。

ジーンズのボタンを外し、下腹を爪でなぞってやると、ルカの喉が小さく鳴つた。ショーツの上から溝をなでると、そこがもう熱くて湿つてるのがわかる。

「布、邪魔だろ」

ショーツの片側を引っ張つて横にずらし中指で割れ目をなぞる。

とろつとした汁が指腹に移る。指を見せつけるように目の高さまで上げ、糸を伸ばしてやると、ルカは耳まで赤くして目を逸らした。

「やだ、そんなの見せないでっ……」

「見せるし、見る。ぜんぶ俺のだから」

濡れを親指に移し、上の小さな突起——クリトリスを軽く押す。すぐ離れて、また触る。一定のリズムで焦らす。

細い太腿が俺の腕を挟み込んできたところで中指を浅く差し込む。内側の襞を搔くように前壁を擦る。指の腹で“ざらつ”としたところを捉え、小刻みに叩く。膣道がきゅっと締まり、俺の指を呑む。親指はクリトリスを円を描くように撫で、時々ツンと弾く。

「はあ……やだ……そ……頭、おかしくなる……」

「おかしくなれ。もつと濡らせ」

手首までじんわり濡れるまで責めて、指を引き抜く。

俺はルカの手を掴んで、自身を握らせる。

「持つて……根元支えてろ」

「……太い……こんなの、全部、入るかな……」

膝を開かせ、腰を落とす。温度の差が一気に消える。

入口を“ちゅ”つと吸う感触。浅く押すと、狭さが押し返す。

ルカの目を見たまま、息を合わせる。

「吸つて、吐いて。そう……」

ゆっくり、一ミリずつ押し込む。壁が俺を掴んで離さない。

最初の狭さを越えた瞬間、ルカの爪が俺の二の腕に食い込む。

「つ……！ 待つて……もう少し、慣らして……」

「深呼吸。ほら、俺の目見ろ」

ルカが小さく頷く。もう少し、今度は角度を変えて。奥の抵抗がふつとほどけ、カリが“ぬるつ”と通る。

半分まで入ったところで一度止め、戻す。

濡れを引き連れてまた入る。膣道全体に滑りを行き渡らせる。

「……入ってきてるの、わかる……お腹、熱い……」

ルカの腰の下に手を差し入れて奥の柔らかい突起を探り当てる。

根元まで収まつた感触が、背骨まで刺さつて視界が白くなる。

「全部、入った。どうだ」

「きつい……でも、満たされてる……動いて……」

わざとゆつくり引く。ぬちぬち、という音が小さく部屋で跳ねる。

カリに引っかかり、抜け際に名残惜しく締め上げてくる。

クリトリスに親指を戻して腰の打ち込みに合わせて円を描く。

「んつ……ん……そこ、好き……もつと触つて……」

「言えよ。どこが好きか」

「クリ……触られると、下まで痺れる……足が勝手に……」

言葉の途中で腰が跳ねる。胸を片手で寄せて乳首を口に含む。舌で弾いて、吸う。下は一定のリズムで奥の一点を叩き続ける。指はクリトリスに圧を乗せたり抜いたり、わざとペースを乱して焦らし、また戻す。

「や……もう、イクッ……イッ……ちや……う……の……つ……ああ……つ

「我慢。一緒に」

浅いストロークから、少しだけ深く、少しだけ速く。

膣が反射で締まり、竿に細かい痙攣が伝わる。

角度を上げてカリで引っ掛けて擦り上げるように突く。

ルカの脚が俺の腰に絡みついて、奥をもつと欲しがるようには締めてくる。

「言え。お前は、誰の……だよ」

「私……悠真の……っ、だから最後までちょうどいい……！」

腰を掴んで引き寄せ、一段と深く沈める。

当て続ける場所はぶらさない。クリトリスは小さく細かく。三点攻めを崩さず、息とテンポを合わせる。

汗が顎から落ちて彼女の鎖骨を滑る。

「……だめ、いく、あつ……イッちゃ……う……ほんとに……！」

「いけ。俺も！」

最後、ブレずに刻む。膣がぎゅうっと締まって、内側が波打つ。その波に合わせて深く押し込み、熱を内側に堰き止めた。

彼女を抱きしめ、震えが鎮まるのを待つ。抜くと、名残惜しそうに膣口がキュツとすぼまつて、縁に透明な糸がまた伸びた。

ルカは髪を耳にかけ、汗で光る鎖骨を上下させていた。

俺は内側に残った痺れを散らすようにクリトリスに軽く触れる。

「ひやあんっ！」

「覚えた。ここ、この角度。ぜんぶ、俺が教える。俺が覚える」

頬を舐めるみたいにキスして、息が整うまで、胸と胸を当てて脈を揃える。ルカは目を細めて、かすれ声で笑った。

俺は彼女の背中を撫でながら、これから毎日を思い描く。朝起きて、一緒に学校へ行き、帰って夕飯を作つて、笑つて。夜は、今日みたいに抱き合つて眠る。

簡単で当たり前で、でも一番欲しかった日々。

## 第二話

翌日からの暮らしは、本当に忙しかった。

初めての講義、慣れないキャンパス。

俺は近所の弁当屋でバイトを始め、閉店作業で帰りは遅くなる。

ルカは新歓の帰りにコンビニスイーツを買ってきてくれる。

風呂上がりに甘いものを分け合って膝をくっつけてドラマを見る。

彼女はよく笑い、よく食べ、よく眠った。

俺も疲れていても、彼女の笑顔に救われた。

ある日、ルカが新しいリップを塗つて鏡の前で口をすぼめていた。

薄いピンクが、元の唇より少しだけ艶を増す。

それだけのはずなのに、胸がざわついた。

次の週、彼女は新しいトップスを買つてきた。

鎖骨がいつもより見えていた。耳元の小さなピアスはサークルの先輩にもらつたらしい。

「どう？ 変じゃない？」

「……似合つてるよ」

心からの言葉のはずなのに、喉の奥で何かが引っかかる。

彼女は笑つて俺の頬にキスを落とし冷蔵庫からプリンを二つ出す。スプーンで一口分けてもらひながら俺は胸のもやを飲み込んだ。